



17年の若返り —再び臆面もない精神論的保存学論訓話—

国立環境研究所生物圏環境研究領域長
渡邊 信

平成元年7月7日の七夕、武田薬品工業 研修所にて開催された日本微生物株保存連盟の総会で承認された山里会長の体制のもとで、40歳という若輩ものであった私に幹事を委嘱されて以来、17年間、学会の中枢部で働かせていただいた。さらにこれから2年、辨野会長体制のもとで、渉外担当の理事として活動させていただくこととなっている。当時の会長、副会長、幹事で当該学会中枢部に継続して残っているのは私だけであり、相当の古狸になってしまったと思うが、JSCCは私が最も大事にしている学会であり、これからもお役にたてることを嬉しく、かつ誇りに思っている。

最近になって、昭和の最後の年である63年（1988年）の日本微生物株保存連盟会誌第4巻2号に「保存学論：保存を保存学として体系化させるための方策的課題」と名付けた提案・意見書を臆面もなく書いたのを思い出し、見直してみた。特に保存学確立にむけての方策的課題の項で、面白いことを言っていたなと思う。下記に主要なものをひろってみると、

- ・「保存学」の定義、目的、内容について討議し、まとまった答申として、JFCC 幹事会へ提言する。答申の内容は、例えば、
 - 「日本微生物株保存連盟から日本微生物株保存学会へ」
 - 「日本でメインバンクの設立と各機関のカルチャーコレクションとのネットワーク体制構築の必要性を科学技術庁へ要望すること」
 - 「保存研究者の処遇上の問題」などなど…
- ・JFCCに一般講演を！
- ・人材交流を：JFCC 機関連絡会議の改革
- ・科学技術庁への要求（昭和59年に出した諮問「遺伝子資源としての生物の確保方策について」に対して、具体策を全くだしてこないのはなにごととかみついている）

などがある。

お気づきの方もいると思うが、上記のほとんどは実現している。平成5年の総会で日本微生物株保存連盟（JFCC）から日本微生物資源学会（JSCC）への発展が了承され、平成6年の第1回日本微生物資源学会から一般講演がスタートした。カルチャーコレクション実務担当者会議がカルチャーコレクション委員会に設置され、毎年、独自の会合をもち、実務者間での情報交換を活発におこなっている。学会には微生物系統保存に関する研究、技術開発、管理に関して功績のある研究者・技術者に対して、学会賞、奨励賞、技術賞が設けられた。実現まで時間はかかったが、平成14年度から文部科学省ではナショナルバイオリソースプロジェクトが推進されており、各種生物資源の中核機関を中心としたネットワークが構築されてきている。さらにRIKEN-BRCやNBRCが設立され、今後互いに切磋琢磨しながら日本の生物

資源のメインバンクとして機能していくことが期待される。このように、駒形元会長、山里元会長、中瀬元会長、西村前会長等関係者各位の努力により、微生物を含む生物資源の研究・事業環境は予想以上に改善された。しかし、なぜかもう一つ達成感がわかず、満足度は決して高くない。あの ICCC-10 に感じた達成感と満足感及びその後が続いた心地よい脱力感が、この件に関してはない。

なぜなのか思いつくところを列挙してみると、

- 1) 微生物カルチャーコレクションの歴史的な活動実績にもかかわらず、ナショナルバイオリソースプロジェクトにおいて、動物・植物資源と比べて、微生物資源のシェアが少ない
- 2) 大学での微生物カルチャーコレクションの状況はむしろ悪化している
- 3) JSCC の会員数（通常会員と賛助会員）の減が続いている
- 4) 全体として JSCC の活性がなかなかあがってこない
- 5) 実務者の処遇改善がもうひとつ進んでいない

というところか。としたら、まず、動植物分野と対等以上のシェアを占有するためには、中核となる微生物資源機関が真にその中核機能を発揮することが必要であろう。個人的には規模の大きい NBRC と RIKEN-BRC/JCM にそれを期待したい。微生物資源に関して、最高の知識、技術、情報を備え、その存在と活動が他の中小機関の事業の活性化をもたらすというのが中核機関であることを再認識し、それに向けた活動をおこなってほしい。ただし、どちらも高齢化が進んでいるように思われ、生きのよい優秀な若手の人材を確保できるかどうかは今後の発展のポイントとなるだろう。また、中規模、小規模の機関は独立性を担保しつつ、中核機関からもたらされる恩恵を最大に生かしつつ、特徴を明確にした専門店化を進めることが必要である。そこでの JSCC の役割を一口に言えば、微生物資源研究の発展を基本的な使命とし、短期的には中核機関を育成し、中正公立の立場で中核機関の協調を図りつつ、中小機関も含めた微生物資源機関の活性化と発展を実現していくことである。特に、新会長、新カルチャーコレクション委員長をはじめとした新理事の役割は重大であり、JSCC の活性化を実現することと各機関の発展とは同義であることを認識し、積極的な活動をおこなっていかねばならないであろう。

最近の JSCC の活動をふりかえってみた時、私は、あえて自省をこめて、「忙しさを理由して、私達はいままで大事なところをさぼっていたのではないか」と言わざるをえない。例えば、カルチャーコレクションの実務担当者には 20～40 年間地道に保存事業を支え、技術賞にふさわしい方が多くいる。授賞はささやかながらも処遇改善に役立つ。しかし、私達はそれをしっかり認識し、実行してきたと胸をはって言えるだろうか。

私は、「保存学論」などと臆面もなく書くことができたあの頃にもう一度もどってみたいと思っている。頑張るだけ頑張ってみて、もし、志が豊かで、目が輝やいている若手が学会の中核部で活躍するということが実現できれば最高である。

Title: Getting 17 years younger — Moral discourse on culture collections given you again without sense of decency

Makoto Watanabe, Environmental Biology Division, National Institute for Environmental Studies